

嶋満神社便り

令和二年九月号(第二十三号)

発行 嶋満神社奉賛会

本年度の例祭無事終了

今年も当嶋満神社の例祭が去る八月二十三日(日)、吉坂の岩室稻荷神社、森本宮司様の手により厳かに執り行われ、無事終了いたしました。

皆様ご存じの通り新型コロナの感染防止のため、町内の各行事も中止となる中、当例祭も規模を大幅に縮小し、参列も町内会と当奉賛会の一部役員のみという寂しいものでしたが、貞観年間より続くという由緒あるお宮をお祀りするという奉賛の気持ちのこもった、身の引き締まる雰囲気のものとなりました。

尚、ご参列いただけなかった会員様方にもご丁寧にお供えをいただきました。お一人ずつのご芳名は挙げませんが、この場を借りて厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。ございました。

古くは鎌倉時代、元寇の折に「敵国降伏」の示現があったという歴史を持つ当社ですが、今般の新型コロナ禍も嶋満大神のお力により、早々に収まって欲しいと念ずるものです。



「えびす神」には、蛭子(エビス、ヒルコ)と事代主(コトシロヌシ)の二柱があるのをご存知でしょうか。全国の「えびす」神社は、このどちらかをお祀りしています。

「蛭子」は「蛭児」「ヒルコ」で、イザナギ、イザナミの最初の子ですが(二番目がアマテラス)、障害を持った子で脚が立たず、「ヒル」のような子だったので、葦の船に乗せられて海へ流されてしまいます。その後、茅渚の海(ちぬのうみ：大阪湾)で漁師さんに引き上げられた後、西宮へお祀りされて商売の神様となります。コトシロヌシはオオクニヌシの子で、漁業の神様。共通する海の関係から両者は結びついて同じ神様とされるようになります。

こんにちの感覚で見れば「障害がある子を海へ流す」なんてひどい話と思いますが、そういう意味ではないようです。

もともと「えびす」とは「よそ者」の意味、海辺に流れ着いたイルカの死体などが大漁をもたらすという「漂着神」への信仰と伝説、また「ヒルコ」は「日子」、太陽の子、古代ユーラシアにも広く分布する「太陽の子」の漂流譚、イザナギ・イザナミ伝説の発祥の地である淡路島の「太陽神の象徴を海に送り流す行事」などの伝統等が結びついて生まれた神様ですから、「海へ流された」おはなしは神様の権威付けのために後からつけられたものなのかな、と思います。

神話にはこのように海に流されたり、首を切り落とされて殺されたり、また「ブサイク」な顔の神様が結婚を断られたりと、結構残酷なお話がたくさん出てきます。どれもが先述の「神の権威付け」から来る「王権の正統化」、一方庶民の側からは「自然や生命、農作物への畏敬の念」から生まれたものだと言われていますが、またいずれご紹介したいと思います。本日はこれにて。



えびすやま

漁業の神様、商業の神様として有名な「恵比寿神社」

資料出典 「日本の神々」松浦 健 著

「日本の神様と楽しく生きる」 平藤 喜久子 著